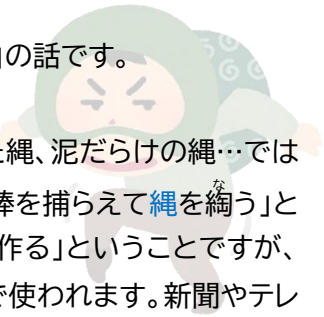
広国ドリル(国語)のポイント　その3　文法の話①



国語の3回目です。今回と次回は、言葉のつなぎ方、いわゆる「文法」の話です。

その前に、「泥縄」は、どんな縄か分かったでしょうか？　泥でできた縄、泥だらけの縄…ではありません。実は、捕まえた泥棒を縛るための縄です。「泥縄」は、「泥棒を捕らえて縄を綯う」ということわざを短くした言葉です。「泥棒を捕まえた後で慌てて縄を作る」ということですが、そこから「事が起こってから慌てて対策をしようとする」という意味で使われます。新聞やテレビのニュースなどでもよく使われますので、覚えておきましょう。
前回も書きましたが、このような語源を知っておくと、意味用法を思い出す助けになります。

では、本題です。言葉のまとまりの単位として、「文章・段落・文・文節・単語」といった用語があります(忘れた人は、広国ドリルで復習を)。文章のパーツが段落、段落のパーツが文、文のパーツが文節、文節のパーツが単語です。どのレベルでも、パーツごとの意味とパーツ間のつながりを読み取ることで、全体の意味が理解できます。

最も小さな単位が単語です(専門的にはもっと小さくできますが)。単語の分類について、自立語、付属語、体言、用言、名詞、動詞…など勉強してきましたね。これらの用語を忘れていても、国語は使える…のですが、用語が表す分類を理解しておくと、文を読み書きするとき、他の語句とのつながりや、単語の役割の理解に役立ちます。

まず、自立語(名詞、動詞など)と付属語(助詞と助動詞)は、文の中で、前者が実質的な意味、後者が文法的な意味(機能)を担うという点で区別されます。下の文の「を」や「に」は、付属語(助詞)です。これらが「小麦粉」や「水」といった自立語にくっつく(付属する)ことで、「小麦粉」や「水」と、「溶く」とのつながりが表されています。

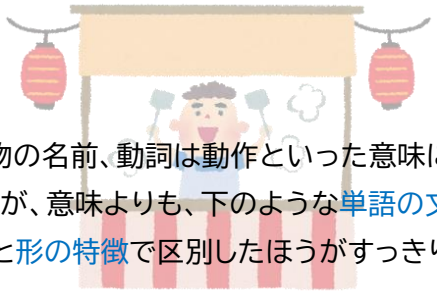
小麦粉を水に溶く。

体言(名詞)と用言(動詞、形容詞、形容動詞)は、前者が活用せず、文の主語になれる、後者は活用があり、それだけで述語になれるといった点で区別されます。活用は文に入れるときの形の変化で、主語や述語になれるというのは、文の骨格をつくる重要な役割を担えるということです。下の文は、体言・用言と、付属語だけでできています。

大将が鉄板で生地を焼く。　大将・鉄板・生地:体言(名詞)　焼く:用言(動詞)

骨格をつくる体言や用言に修飾語句をつけると、文を詳しくできます。

陽気な大将がアツアツの鉄板で生地をさっと焼く。



では、品詞は、どのような区別でしょうか？　名詞は物の名前、動詞は動作といった意味による区別でしょうか？　いろいろな考え方があるのですが、意味よりも、下のような単語の文法的な性質（他の語句とのつながり方や文で担う役割）と形の特徴で区別したほうがすっきりします。

・名詞：活用なし。助詞をつければ主語になれる。
・動詞：活用あり。単独で述語になり、体言を修飾するとき最後の音がウ段（「る・す・つ」など）。
　例）生地にのせるキャベツ
・形容詞：活用あり。単独で述語になり、体言を修飾するとき最後の音が「い」。
　例）薄い豚肉と細いそば
・形容動詞：活用あり。単独で述語になり、体言を修飾するとき最後の音が「な」。
　例）新鮮な卵
・副詞：活用なし。主語や述語にならず、主に用言を単独で修飾する。
　例）一気にひっくり返す。
・連体詞：活用なし。主語や述語にならず、体言を単独で修飾する。
　例）あのソースをかける。

では、「きれい」の品詞は何でしょうか？　形容詞と言いたくなりますが、体言修飾では「きれいな皿」となり、「きれいにする」など活用もあるので、形容動詞です。

副詞と連体詞は、用言を修飾するかどうかで区別できます。「いわゆる」は、「食べる」「熱い」などの用言を修飾できず、「いわゆる広島風」のように体言を修飾するので連体詞です。

「健康」の品詞は何でしょうか？　当然、名詞…ではなく、体言を修飾すると、「健康な人」となります。ということは、形容動詞です（名詞としても使います）。「病気」はどうでしょうか？　病気な人？　病気の人？　本来は「病気の人」ですので、名詞です。しかし、最近は「病気な人」という言い方もときどき耳にしますので、今後形容動詞になっていくのかもしれません。

品詞分類は、他の語句とどのようにつなげればよいか、文のどの位置にどのような形で入れればよいかなどを考える手がかりになりますので、復習しておきましょう。

では最後に、「大きな」の品詞は何でしょうか？　考えてみてください。
もちろん、広国ドリルによる復習もお忘れなく。

健康科学部社会学科　杉本　巧